

BULLETIN
OF
THE HIROSHIMA PREFECTURAL TECHNOLOGY RESEARCH INSTITUTE
AGRICULTURAL TECHNOLOGY RESEARCH CENTER

March 2021

**広島県立総合技術研究所
農業技術センター研究報告**

第 95 号
令和3年3月

広島県立総合技術研究所
農業技術センター
(広島県東広島市八本松町原)

農村部での農業体験農園の特徴と展開可能性 ：広島県安芸高田市の(有)援農甲立ファームでの事例を基に

西濱健太郎

キーワード：農業体験農園，中山間地域，交流，返報性，利用者

背景および目的

山田・門間（2006）は、農業体験農園を農業者の所有農地において、園主の経営・生産計画と栽培指導の下、地域住民を主とした利用者が農業を体験するシステムと定義している。また、市民・区画農園とは、その性格が異なることも指摘している。八木（2008）は、市民農園との違いについて、農業体験農園が農地の市民への貸し出しを伴わない点、また作付計画、栽培計画の責任や収穫物の処分権が農家側にあり、一般市民に農作業の一部を体験してもらう形態にあることを指摘している。原（2009）は、農業体験農園について、これまで農業者が「タダ」で提供していたような農業景観、農村文化、農業技術や「土いじり」に価値をつけ、農地を農業のテーマパークとし、技術を農業のカルチャースクールとして地域住民とともに農業・農村を守っていかうとした取り組みとしている。

農業体験農園は、東京都練馬区の生産者が神奈川県横浜市の事例を参考に開設したことが起源（佐藤，2011）とされており、都市部を中心に拡がりを見せている（藤井ら，2018）。このことには、市街化区域内では、相続税納税猶予の適用が可能であり（佐藤，2012）、税制上の利点が一因として考えられる。特に、東京都内の事例については、これまでも多くの研究が行われており、農業体験農園の利用者に対する調査として、利用者の農業理解につながる（稲葉ら，2017）、利用者の満足度が高く、利用によって農業に対する認識が大きく変化すること（山田・門間，2006）、農園までの距離が離れると利用者の需要が低下すること（八木，2013）などが明らかにされている。しかし、農村部での調査は限定的である。

藤井ら（2018）は、都市部での農業体験農園の調査を基に、交流面での役割として、反復的な交流によって生み出される信頼関係・農園への愛着の形成、農園主を補助的にサポートする利用者が育成されることなどをあげ、都市部だけでなく農村部においても十分展開可能性を持つことを指摘している。また、原（2009）は、農村固有の資源や文化、そのような総合的な地域資源を生かした農業体験農園を開設すれば、都市部にはない魅力ある農園に発展する可能性があることを指摘している。佐藤（2012）は、神奈川県内の市街化区域内外の体験農園を比較し、市街地から遠距離にある地域における農業体験農園の展開について、粗収益確保に果たす農業体験農園の役割は現状小さく、需要を喚起しつつ利用料をいかに高められるかが課題となることを指摘している。

以上のように、農業体験農園は、都市部を中心に研究が行われており、農村部の農業体験農園で利用者に対して調査を行った研究は見当たらない。そこで、著者は、まず農村部での農業体験農園の特徴を明らかにしようとした。次に藤井ら（2018）が指摘している農園主と利用者の反復的な交流の役割に着目し、交流によって生み出される利用者の意識の変化を解明しようとした。その上で、農村部での農業体験農園の展開可能性を提示することを目的としたいと考えた。

本稿の構成および問題意識

本稿では、まず、農業体験農園の実施内容と利用者の属性を調査し、先行研究との比較により農村部での農業体験農園の特徴を明らかにする。

次に、利用者の意識の変化について解明を試みる。先行研究では、農業体験農園利用者の意識の変化として食農教育の面での効果が強調されているが（山田・門間，2006；原，2009；稲葉ら，2017）、利用者は参加前から食農教育だけを目的に参加を決めるわけではないだろう。

また、農業体験農園への参加によって、参加前には気づいていなかった価値を見出すことも想定される。逆に、農業体験農園が利用者の期待に応えられなければ、出席率の低下などを招く恐れもある。そこで、本稿では、反復的な交流の効果という視点から利用者の農業体験農園への期待度の変化について明らかにする。

加えて、農業体験農園への協力意向について調査する。先に触れたように、藤井ら（2018）は、反復的な交流によって農園主を補助的にサポートする利用者、すなわちサポーターが育成されるとしているが、サポーターの協力範囲までは検討していない。過疎による人手不足問題を抱える農村部にとっては、利用者からの協力が農業体験農園の活動に限定されるよりも、広く農村地域全般の活動に及ぶ方が効果的であろう。先行研究では、稲葉ら（2017）が農園主への協力意向と農業の意義に対する理解度との間に正の相関があるとしている。すなわち、農業理解度が高まることで、協力意向が生じることを指摘している。本稿では少し視点を変えて検討を行うこととする。チャルディーニ（2014）は、社会心理学の観点から返報性が、他人がこちらに何らかの恩義を施したら、自分は似たような形でそのお返しをしなくてはならないという人間文化だけの特徴的なルールであると説明する。また、返報性には次の3つの特徴があるとする。1つ目は、非常に強い力を持っていること、2つ目は、望みもしない厚意を最初に相手から受けた場合にも適用されること、3つ目は、恩義を受けっぱなしにしていることへの不快感から恩義を受けた側がより大きな頼みを聞いてしまうことである（チャルディーニ、2014）。そして、このような特徴を持つ返報性のルールによって、社会にとって有益なさまざまな持続的な人間関係や交流、交換が発達することになる（チャルディーニ、2014）。利用者が行うサポートの根底には、この返報性の原理が働いていると考えられる。利用者が農業体験農園からどの程度恩義を受けたと感じるか、その程度の差異が協力意向に影響することが想定される。そこで、本稿では、利用者が受けた恩義の影響、および利用者の協力が及ぶ範囲について検討する。

最後に、参与観察で得られた利用者、農園従業員の声および質問紙調査の結果を基に農村部での農業体験農園の展開可能性を提示したい。

調査対象

調査対象とした有限会社 援農甲立ファーム（以下、援農）は、2002年に広島県安芸高田市甲田町上甲立に設



図1 広島県における(有) 援農甲立ファームの位置

資料：筆者作成（島嶼部省略）
注：広島市は市役所の位置を示す。

立された集落営農法人である。安芸高田市は、広島県の北部に位置しており、人口が約28千人、面積が538km²で、中山間地域に該当する（図1）。65歳以上の人口比率である高齢化率は、安芸高田市が2015年時点で38.7%と全国平均の26.6%、広島県平均の27.5%より10ポイント以上高くなっており（総務省統計局、2015）、高齢化が課題となっている。

援農は、従業員数が26名（うちパート10名）、総農地面積が43ha、（水稲30ha、白ネギ、キャベツなどの露地野菜12ha、アスパラガス、ミニトマトなどの施設野菜1ha）となっており、水稲以外に多品目の野菜を栽培している点が特徴である。「援農」という名には、地元の農業を応援し、地元の人にも応援してもらえる法人を目指していきたいとの思いが込められている。援農代表者は、農業体験農園に取り組む目的として、人を呼び込むことで地域交流を深化させることと従業員の人材育成の2点をあげている。

調査方法

著者は、2019年に実施された初年目の農業体験農園における全16回の講習会のうち12回に出席し（表1）、参与観察を行った。この中で利用者の期待の変化、利用者間・利用者と農園従業員との関係性の構築過程および農村部での展開可能性などについて探索的に観察を行った。この結果を基に最終回の2019年12月22日に利用者に対して質問紙調査を実施した。質問紙調査は、20歳以上の参加者全員に調査用紙を配布し、グループ属性が分かるよう

表1 農業体験農園における利用者の参加状況、実施内容および参与観察実施状況

講習会 開催日	参加状況		実施内容							参与 観察	
	グルー プ数	人数	収穫	播種・ 定植	整枝・ 誘引	施肥・ 土寄せ	間引き ・除草	片付け	講習		イベント
5月12日	10	26		キュウリ 他						開園式	*
5月26日	8	20	チンゲン サイ他	ブロッ コリー他	パプリカ 他		ダイコン 、カブ				*
6月9日	10	24	コマツナ 他	サツマ イモ	キュウリ 、トマト						*
6月23日	8	24	ハウレン ソウ他		ピーマン 、ナス他		○		果菜類の 仕立方法	副市長来訪、 クイズ出題	
7月14日	11	27	キュウリ 他	ダイコン 他		キュウリ 、ナス他					*
7月28日	10	20	インゲン マメ他						農薬と 天敵利用	クイズ 結果発表	*
8月11日	8	17	トウモロ コシ他	ジャガ イモ			○				*
8月25日	9	28	トマト、 ナス他							白ネギ皮むき 体験、収穫祭	
9月8日	9	20	パプリカ 他	ハクサイ							*
9月22日	8	21	ピーマン 、ナス他				○			前期活動の スライドショー	*
10月13日	6	14	サツマ イモ他			ブロッ コリー	ダイコン 、カブ他				*
10月27日	9	19	オクラ、 カブ他	レタス			ニンジン 他			焼き芋	
11月10日	8	20	ダイコン 、カブ他	ニンニク				オクラ			
11月24日	8	20	ハクサイ 他					ナス他			*
12月8日	8	20	カリフラ ワー他							餅つき	*
12月22日	10	25	ジャガ イモ他							食事、 語り他	*

注1：当初の参加グループは11であったが、1グループが家庭の事情で7月14日を最後に中断したため、これ以降は10グループでの活動となった。講習会開催日に不参加であっても、開催日以外の日に作業を行うグループもあり、これを含めると途中で中断した1グループを除いて2回連続で不参加となるグループはなかった。

注2：実施内容で作物名が特定できない場合は、○印で表示した。講習の「農薬と天敵利用」は著者が講師を務めた。

注3：参与観察については、実施日を*印で表示した。

に回収した。結果として、10グループ、19名が回答した。質問紙調査の設問は、先行研究および参与観察の結果を基に、年代、性別、居住地、居住地の周辺環境、農地の保有状況、援農までの移動時間、農業体験農園を知るきっかけ、サークル等の活動への積極性、農業体験農園の満足度、参加前・参加後の期待度および協力意向とした。

居住地の周辺環境については、岐阜市の体験区画を有する市民農園利用者に対して調査を行った三宅・松本(2001)の設問を用いた。

参加前・参加後の期待度については、山田・門間

(2006)の設問および参与観察によって得られた意見を基に、「収穫物」、「農作業」、「食農教育」、「健康」および「交流」の5分類18項目とし、参加前、参加後の期待度を4件法で測定した。なお、期待度は想起法で測定し、参加前は開園当初の自分を思い出して回答してもらい、参加後は実際に参加してみて、各項目にどの程度期待して参加するようになったかを回答してもらった。

協力意向は、「農業体験農園」、「(有)援農甲立ファーム」、「農業理解の促進」、「食品安全理解の促進」、「周辺地域」および「定住促進」の6項目の活動への協力意向

表2 農業体験農園利用者の属性、情報入手経路および農業体験農園の満足度

項目	属性	回答数 (名)	割合 (%)	項目	属性	回答数 (グループ)	割合 (%)	項目	属性	回答数 (名)	割合 (%)
年代	20代	1	5.3	居住地の周辺環境	ほとんど住宅地	6	60	サークル等の活動への積極性	積極的に参加	3	15.8
	30代	5	26.3		住宅の間に農地あり	2	20		ときどき参加	5	26.3
	40代	5	26.3		農地が多い	2	20		あまり参加していない	6	31.6
	50代	5	26.3	農地の保有状況 (複数回答可)	農地あり	3	30		まったく参加していない	5	26.3
	60代	3	15.8		市民農園を借りている	0	0		農業体験農園の満足度	とても満足	12
	70代以上	0	0		菜園のできる庭あり	4	40	やや満足		6	31.6
	性別	男性	10		52.6	保有なし	4	40		やや不満	1
かなり不満				0						0	
農業体験農園を知るきっかけ (複数回答可)				3						30	
居住地	安芸高田市外	18	94.7	チラシ	3	30	新聞	2	20		
				ラジオ	3	30		援農のホームページ	1	10	
				その他	2	20		その他	2	20	
				(知人, スーパーのイベント)							

注：回答数は10グループ、19名による調査結果。

についてそれぞれ4件法で測定した。測定結果については因子分析を行い、抽出された因子を従属変数とする重回帰分析により協力意向に影響する変数を特定した。独立変数には「サークル等の活動への積極性」および「農業体験農園への満足度」を用い、交互作用についても検討した。これらの変数を用いた理由は次のとおりである。原（2009）は、農業体験農園がカルチャースクールの側面を持つことを指摘しており、個人特性として、「サークル等の活動への積極性」が高い人は、幅広い活動に対しても協力意向が高いことが想定される。「農業体験農園への満足度」については、返報性の視点から利用者が受けた恩義の度合いとして協力意向に影響していることが想定される。また、協力意向への影響が想定される属性として、「年代」、「性別」および「居住地の周辺環境」を制御変数とした。

結果および考察

援農での農業体験農園の実施内容を表1に示した。初年目となる2019年の講習会は、5月から12月までの8か月間、第2、4日曜日の午前中に3時間ずつ開催された。当初11グループが参加したが、家庭の事情により1グループが途中で参加を中断したため最終的には10グループ、最大28名が参加した（表1）。区画は、1グループ当たり90m²（露地個人70m²、露地共通8m²、ハウス個人12m²）で、利用料金は月3千円、8か月の開催なので年間24千円という設定であった。これは、東京都練馬区の約30m²で年間38千円（練馬区民以外は50千円）（藤井ら、2018）と比

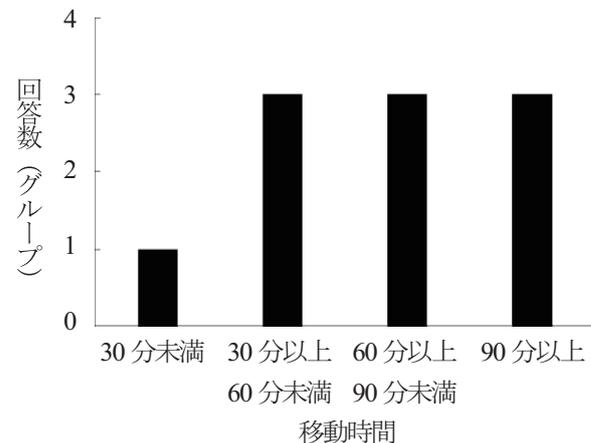


図2 (有) 援農甲立ファームまでの移動時間の分布

注：車での片道移動時間 (n=10)。

較すると1グループ当たりの規模は大きく、安価であった。規模の面では、農村部では保有農地面積が広い傾向があるため都市部より広い面積での体験が可能になる点の特徴といえよう。料金については、利用者の需要が少ないことを想定して安価な設定としており、農園主側から見ると佐藤（2012）が指摘しているように需要を喚起しつつ利用料をいかに高められるかが課題となる。補助金としては、初年目のみ安芸高田市の民泊・交流・定住促進活動応援補助金（最大20万円）を活用して小農具等を調達していた。利用者は約25品目の栽培を体験し、収穫祭、焼き芋および餅つきなどのイベントも開催された（表1）。

利用者の年代は、20代から60代までと幅広く、男女比はほぼ均等であった（表2）。利用者の居住地は、安芸高

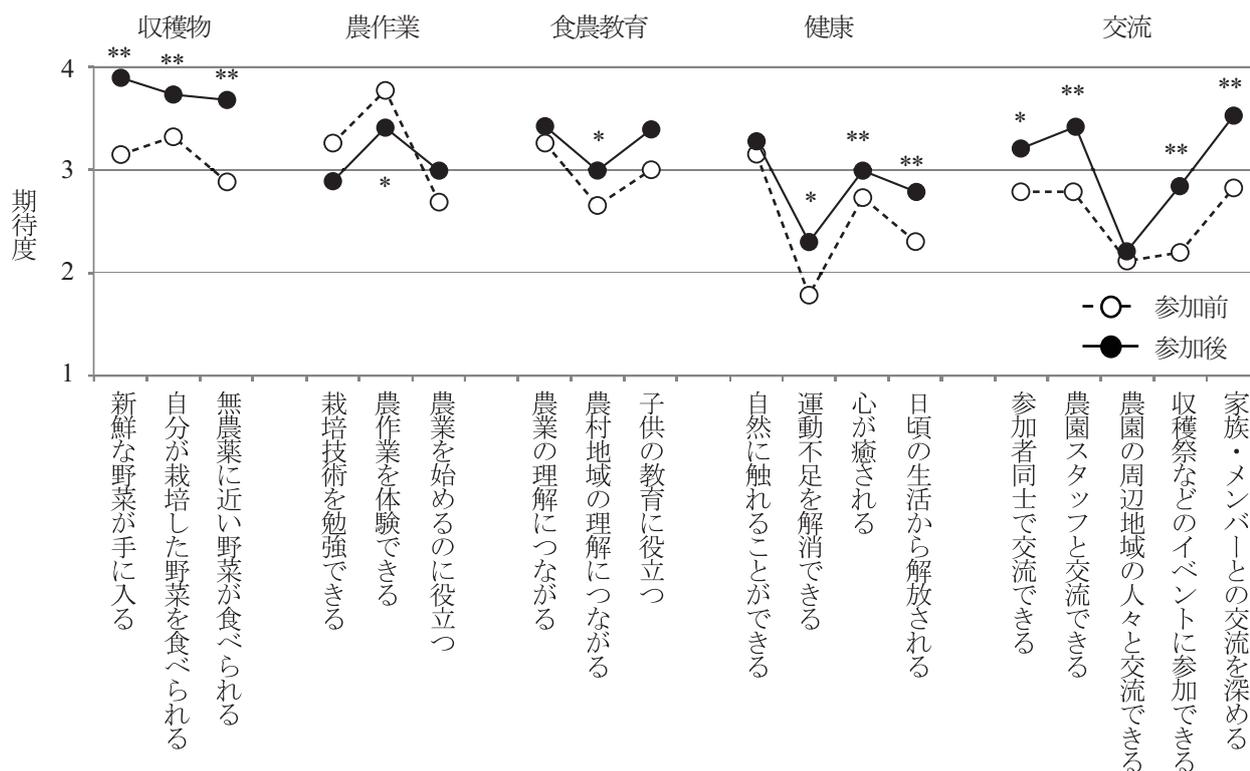


図3 農業体験農園利用者の期待度の変化

注：選択肢は、1：「まったく期待していなかった」、2：「あまり期待していなかった」、3：「やや期待していた」、4：「とても期待していた」、「該当なし」とした。検定はウィルコクソンの符号付順位検定（片側）により、**は1%、*は5%水準で統計的に有意を表す（n=13~19）。

田市以外が多かった（表2）。援農までの移動時間でみても、多くが車で片道30分以上かけて参加しており（図2）、最短が10分、最長が110分、平均すると63分であった。八木（2013）の東京都内の調査では、93%が3km未満からの利用者となっており、これと比較すると遠方からの利用者が多くなる点は農村部での農業体験農園の特徴といえよう。しかしながら、学校等の行事と重なり参加が困難であった10月13日を除いて、10グループ中毎回8グループ以上が参加しており、出席グループ数の低下はみられなかった（表1）。ちなみに、2年目となる2020年の利用は13グループであった。このうち6グループは初年目にも利用しており、リピート率は60%であった。東京都練馬区のリピート率が87.4%と高いこと（藤井ら、2018）に比べると低い割合であった。

居住地の周辺環境は、「ほとんど住宅地」とするグループが60%と多く、「住宅の間に農地あり」、「農地が多い」はともに20%であった（表2）。この結果は、三宅・松本（2001）が都市近郊の立地として調査した岐阜市の体験区画を有する市民農園の利用者とほぼ同等の比率であった。

農地の保有状況は、「保有なし」、「菜園のできる庭あ

り」、「農地あり」に分かれ、「市民農園を借りている」利用者はいなかった（表2）。3グループが農地を保有しているにもかかわらず、農業体験農園に参加していた。この点について、参与観察の中で本格的に農業を勉強したいといった意見を複数の利用者から聞いており、就農を目的として参加している人がいる点は特徴的であろう。

農業体験農園を知るきっかけは、チラシ、ラジオが3グループ、新聞、その他が2グループで続いた。チラシは、地元JAの協力を得て農産物直売所などに置かせてもらっていた。また、農村部での農業体験農園はまだ珍しい取り組みであることから、新聞、ラジオといったマスメディアに取り上げられ、半数の5グループがマスメディアから情報を得ていた。

サークル等の活動への積極性は、「積極的に参加している」がもっとも少なく、「あまり参加していない」、「まったく参加していない」の合計が約58%を占めた（表2）。このことから、サークル等の活動に積極的に参加している人ばかりが農業体験農園に参加しているわけではないという傾向がみられた。ただ、グループ単位でみると10グループ中6グループには、「積極的に参加」、

表3 農業体験農園利用者の協力意向に関する平均および因子分析

項目	平均	因子分析		
		農業・農村振興への協力	農業体験農園・援農への協力	共通性
農業理解の促進への協力	2.5	0.99	-0.22	0.73
食品安全性理解の促進への協力	2.3	0.91	-0.01	0.82
定住促進への協力	1.8	0.66	0.37	0.90
周辺地域への協力	2.1	0.60	0.30	0.69
農業体験農園への協力	3.1	-0.19	0.97	0.73
(有)援農甲立ファームへの協力	2.9	0.13	0.74	0.69
因子寄与		3.59	3.09	

注：選択肢は1：「あまり興味がない」、2：「少しでもあれば協力したい」、3：「できるだけ協力したい」、4：「積極的に協力したい」とし、平均値を表示した（n=19）。因子分析は、最小二乗法、プロマックス回転によって抽出し、0.4以上の因子負荷量は太字で表示した。

表4 農業体験農園利用者の協力意向に関する重回帰分析

変数名	従属変数					
	農業・農村振興への協力			農業体験農園・援農への協力		
	モデル1	モデル2	モデル3	モデル4	モデル5	モデル6
	β	β	β	β	β	β
切片	0.00	0.00	-0.01	0.00	0.00	0.01
制御 年代	-0.21	-0.21	-0.20	-0.30	-0.29	-0.30
変数 性別	0.10	-0.05	-0.04	0.26	0.02	0.01
居住地の周辺環境	1.21 **	1.26 **	1.21 **	0.70	0.68	0.72
独立 サークル等の活動への積極性		0.00	0.02		0.09	0.08
変数 農業体験農園の満足度		0.45	0.47		0.77 *	0.76 *
交互 サークル等の活動への積極性			-0.12			-0.09
作用 ×農業体験農園の満足度						
R^2	0.61 **	0.69 **	0.69 *	0.27	0.50 †	0.50

注：年代は1：20代～5：60代、性別は1：男性、2：女性、居住地の周辺環境は1：「ほとんど住宅地」、2：「住宅の間に農地あり」、3：「農地が多い」、サークル等の活動への積極性は、1：「まったく参加していない」、2：「あまり参加していない」、3：「ときどき参加している」、4：「積極的に参加している」、農業体験農園の満足度は1：「かなり不満」、2：「やや不満」、3：「やや満足」、4：「とても満足」として解析した。**は1%水準、*は5%水準、†は10%水準で統計的に有意を表す（n=19）。なお、制御変数、独立変数間に相関関係は認められなかった。

「ときどき参加」のいずれかを選択した人が1名はいることから（データ省略）、これらの人々が他のグループメンバーを誘って参加している可能性も考えられた。

農業体験農園の満足度は、「かなり満足」が63.2%でもっとも多く、「ほぼ満足」と合計すると約95%の利用者が満足と回答しており（表2）、全体的な満足度は高かったと推察される。

参加前・参加後の期待度については、参加前は「収穫物」、「農作業」および「食農教育」が高く、「健康」および「交流」が低い傾向であった（図3）。次に参加後の変化をみていく。参加後に期待度が低下すれば利用者にとって期待外れであったということであり、向上していれば参加によってその価値に気づかされて期待が高まったと解釈できる。「収穫物」は3項目すべてで統計的に有

意に向上しており（図3）、参加によって収穫物の価値に気づき、参加前の想定以上に高くなったと考えられる。「農作業」は「農作業を体験できる」が唯一統計的に有意に低下していた（図3）。「農作業」では、「栽培技術を勉強できる」も低下傾向であったことから、農作業の学習機会が限定的で、特に秋以降は収穫作業に偏る傾向があったこと（表1）が影響したと考えられる。援農としても、希望者には午後から援農の農作業を手伝ってもらうことで農作業体験を充実させる対策を計画している。「食農教育」は、3項目の中で参加前に一番低かった「農村地域の理解につながる」だけが統計的に有意に向上していた（図3）。このことは、利用者が参加前に農村地域の理解ということまで意識していなかったことが影響したと考えられる。「健康」は4項目中3項目で、「交流」は

5項目中4項目で統計的に有意に向上していた（図3）。「健康」および「交流」は、ともに参加前の期待度が低い傾向であったが、参加を重ねることで価値に気づかされて期待度が向上すると考えられる。参加前から期待度が低く、「交流」で変化の小さかった「農園の周辺地域の人々と交流できる」については、周辺地域の人々との交流が、農業体験農園の中であまり実施できなかったことが影響したと考えられる。

協力意向については、「農業体験農園への協力」がもっとも高く、次に「(有) 援農甲立ファームへの協力」が続く、利用者にとってより身近な活動への協力意向が高い傾向がみられた（表3）。次に、協力意向をより詳細に検討するために、協力意向の因子分析を行った。結果として2因子が抽出され、それぞれ「農業・農村振興への協力」、「農業体験農園・援農への協力」と名づけた（表3）。さらに、この2因子を従属変数とする重回帰分析を行った結果を表4に示す。モデル1および4は制御変数について検討を行った。モデル1については、「居住地の周辺環境」が1%水準で統計的に有意であり、居住地の周辺環境に農地が多くなるほど農業・農村振興への協力意向が高まるという結果であった。モデル4については、統計的に有意な関係は認められなかった。モデル2および5では独立変数の影響を検討した。モデル2については、独立変数で統計的に有意な関係は認められなかった。モデル5については、「農業体験農園への満足度」が5%水準で統計的に有意であり、農業体験農園への満足度が高くなるほど農業体験農園・援農への協力意向が高まるという結果であった。なお、モデル3および6では、いずれも交互作用項は統計的に有意でなく、交互作用の影響は認められなかった。以上のことから、「農業・農村振興への協力」意向には、「年代」、「性別」、「サークル等の活動への積極性」および「農業体験農園の満足度」はあまり影響しておらず、利用者の「居住地の周辺環境」が影響すると考えられた。このことには、居住地の周辺に農地が多い方が、農業・農村振興に対して身近に感じられることが影響しているのかもしれない。また、「農業体験農園・援農への協力」意向には、「年代」、「性別」、「居住地の周辺環境」および「サークル等の活動への積極性」はあまり影響しておらず、利用者が受けた恩義の度合いとしての「農業体験農園の満足度」が影響していると考えられた。初年目の農業体験農園の活動範囲は、食品安全性については講義として実施しているが限定的であり、周辺地域との関わりについても収穫祭の場に限定され、積極的には実施されなかった（表1）。返報性（チャルディーニ、2014）の視点から考えると、農業体

験農園の活動範囲が限定的であったことが、「農業体験農園の満足度」の影響を、直接的に恩義を受けた「農業体験農園・援農への協力」に限定したと考えられる。このことから、農業体験農園の活動範囲を援農に留まらず地域にまで広げ、そこで利用者に満足を得てもらうことができれば地域に対する協力意向も高まる可能性が示唆される。この点に関しては援農としても利用者が地域と関われるイベントを増やしていきたいとの意向を持っている。

最後に、参与観察および質問紙調査から見てきた農村部での農業体験農園の展開可能性として、次の2点を指摘したい。

1つ目は、地域活動への応用についてである。援農としては、農業体験農園を通じて利用者に地域のことも知ってほしい、周辺の農業者には農業体験農園の活動に参加してほしいとの思いがあり、このような活動が援農としての地域貢献になると考えている。農業体験農園の収益は、利用料金として約25万円で援農の経営規模としては小さいが、収益性よりも都市部からの人の往来により活気がもたらされることへの期待が大きい。援農では新規事業として、農産物の加工販売およびイベント開催等によって地域に活気を取り戻したいとの構想があり、農業体験農園を通じて構築された人と人とのつながりが地域に活気を生み出す可能性がある。初年目の活動では、甲立地域振興会の協力により、援農に隣接する地域交流センターを利用することができ、座学や、イベントの会場、駐車場として活用された。初年目から地域の協力が得られており、地域活動への応用は可能と考えられる。また、利用者の中には、過疎問題などに対して関心が高い人もおり、こうした課題に対して皆で意見交換をしたいとの提案も上がっていた。このように、農業体験農園の活動とは別に共通の関心を持った人々の自発的なサークル活動としても、地域活動への応用の可能性を秘めていると考えられる。

2つ目は、就農準備の場としての活用である。援農には、独立就農を目指す従業員もおり、その方たちに話を聞くと、就農を目的とした研修制度は、日程的な問題¹

¹ 例えば、サラリーマンが転職で就農を検討する際、まず農業の内情を知りたいと考えるようであり、そのためにとまった休暇を取得して1週間程度の研修制度に参加することは困難と話す。まずは週末等を利用して実際の農家で作業をしてみたいと考えるが、これを手配してくれる機関は見当たらないそうである。

で参加を諦めるケースが多いようである。農業体験農園の週末に参加可能で農家と一緒に作業ができる点は、就農準備の入り口としてのニーズに応える可能性がある。なお、援農では月単位での利用者が募集しており、就農を検討している人にとっては利用しやすい制度であろう。実際に、就農を考えていた初年目の利用者が、就農を決断するきっかけにもなっていた。

まとめ

1事例という限定的な調査からではあるが、都市部と比較した農村部での農業体験農園の特徴として、1グループ当たりの利用面積が大きいこと、需要を考えると料金が安価になる傾向があること、遠方からの利用者が多く、一部には農地を保有し、就農を目指している利用者もいることが明らかになった。

また、利用者の期待度は、「健康」および「交流」の面で参加前は低い傾向にあるが、参加を重ねることで価値に気づかされて期待度が向上するという点は興味深い結果であった。「健康」および「交流」の面での農業体験農園の価値は、利用者自身が、若しくは利用者間、利用者として農園従業員間で創造していくものなのかもしれない。

さらに、協力意向については、「農業体験農園・援農への協力」といった利用者にとって身近な対象への協力意向が高い傾向にあり、これには「農業体験農園の満足度」が影響していることが明らかとなった。

加えて、農村部での農業体験農園の展開可能性として、地域活動への応用、就農準備の場としての活用を提示した。

農業体験農園による反復的な交流を観察する中で、利用者からは援農従業員への感謝の言葉を聴取した。利用者は、労働力の提供であったり、子供が感謝の絵手紙を手渡していたり、様々な方法で感謝の意思を示す返報行動が観察された。中には心の病を抱える親と参加し、親が快方に向かっていることから涙を流して他の利用者や援農従業員に感謝を伝える姿もみられた。今後は、このような農業体験農園を通じた人と人とのつながりを、事業としてどのように成功させるかが残された課題といえよう。

摘 要

農村部で開設された農業体験農園について、特徴と農業者と利用者の反復的な交流によって生じる利用者意識の変化を参与観察、質問紙調査によって調査した。

農村部の農業体験の特徴として、1グループ当たりの

利用規模が大きく、利用者需要を考慮して料金が安価になること、遠方からの利用者が多く、一部には農地を保有し、就農を目指す利用者もいることが明らかとなった。利用者の期待度の変化としては、「健康」および「交流」面は参加前の期待度が低い傾向にあるが、反復的な参加によって利用者がその価値に気づき期待度が向上することが明らかになった。協力意向については、「農業体験農園・(有)援農甲立ファームへの協力」といった利用者にとって身近な対象への協力意向が高い傾向にあり、これには利用者が受けた恩義としての「農業体験農園の満足度」が返報性として影響していることが明らかとなった。

また、農村部での農業体験農園の展開可能性として、地域活動への応用、就農準備の場としての活用を提示した。

謝 辞

本研究報告の執筆にあたり、和歌山大学観光学部観光実践教育サポートオフィス 特任助教 藤井至 博士、当センターの梶原真二 博士にご校閲を賜りました。厚くお礼申し上げます。

また、快く調査に協力いただいた有限会社 援農甲立ファームの皆様ならびに今回の調査に協力いただいた農業体験農園の利用者には厚く謝意を表します。

引用文献

- チャルディーニ, R. B. . 社会行動研究会訳. 2014. 第2章 返報性: 昔からある「ギブ・アンド・テイク」だが、影響力の武器: なぜ、人は動かされるのか. 誠信書房. pp. 33-94.
- 藤井至・稲葉修武・藤田武弘. 2018. 農業経営・交流の両面からみた農業体験農園の役割: 東京都練馬区農業体験農園を事例として. 農業市場研究27(1): 12-22.
- 原修吉. 2009. 農業体験農園におけるナレッジマネジメント. 農業経営研究46(4): 43-51.
- 稲葉修武・藤井至・藤田武弘. 2017. 農業体験農園による利用者の農業理解への効果. 東北農業研究70: 119-120.
- 三宅康成・松本康夫. 2001. 体験区画を併設した市民農園の実態と効果: 岐阜市の市民農園を事例として. 農村計画論集3: 37-42.
- 佐藤忠恭. 2011. 農業体験農園の起源および構成要素か

らみた定義の考察. 農業経営研究49 (1) : 69-74.

佐藤忠恭. 2012. 農業体験農園の立地と経営上の意義：
市街化区域内外の比較分析. 農業経営研究50 (3) :
17-23.

総務省統計局. 2015. 平成27年国勢調査都道府県・市町
村別主要統計表.

[https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?
page=1&layout=datalist&toukei=00200521&
tstat=000001049104&cycle=0&tclass1=000001049105
&tclass2val=0](https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&layout=datalist&toukei=00200521&tstat=000001049104&cycle=0&tclass1=000001049105&tclass2val=0). (2020年12月2日参照).

八木洋憲. 2008. 都市農地における体験農園の経営分析：
東京都内の事例を対象として. 農業経営研究45 (4)
: 109-118.

八木洋憲. 2013. 都市部における体験農園経営の立地と
利用者需要：東京都内を対象とした実証分析. 農村
計画学会誌32 : 323-328.

山田崇裕・門間敏幸. 2006. 農業体験農園が利用者に及
ぼす効果の解明：農業体験農園利用者の意識とその
変化に基づいて. 農業経営研究44 (1) : 67-70.

Characteristics and development possibilities of the community garden in rural area: A case at “Enno-Kotachi Farm” in Akitakata city, Hiroshima

Kentaro NISHIHAMA

Summary

This study examined characteristics of the community garden in rural area, and changes in user consciousness by repeated interaction. The author used participation observation and questionnaire survey for users. As a result, compared with urban area, characteristics of the community garden in rural area were (a) the use area per 1 group was bigger, (b) considering user demand, the charge was cheaper, (c) while a lot of users came from far-off areas, several users possessed farmland and aimed to engage in farming. Users' expectations for 'Health' and 'Interaction' before participation were low, however repeat participation made users aware of its value and raised their expectations. Users tended to cooperate with familiar objects such as 'the community garden' and 'Enno-Kotachi Farm'. Moreover, 'satisfaction of the community garden' as obligations received by users influenced this fact as reciprocity. As development possibilities of the community garden in rural area, the author proposed application to local activities and use as the occasion for farming preparation.

Key words : Community garden, Hilly and mountainous areas, Interaction, Reciprocity, User